はじめに

本講義はある程度現代文を勉強した人が旧帝大などの難関国公立大合格レベルに達するための講座です。ですから、問題も講義内容も最高峰のものを用意しました。予習の段階で全くわからない問題があったとしても気にせずに講義で理解してください。すると、当初は難しいと思えた問題にも太刀打ちできるようになるでしょう。

五日間でみなさんの頭脳に革命を起こしてみせます。

本講義の現代文の考え方

本講義は文章を従来の「意味論」だけでなく「統語論」の側面からも解説していきます。もちろん文章には「意味」があります。しかし、「意味」というのは読者の側に生成される主観的なものでもあります。ですから、「意味」ばかりを追求していくと、「読者によって意味が異なる」ということが起こり得るのです。

一方、大学入試の問題はたとえ最高峰の記述問題であろうとも、「読者によって解答が異なる」ということはありません。そこには客観的に正しい答えがあって、その答えや答えに至るプロセスがいかなるものかによって点数がつけられます。であれば、言語の客観性である「統語論」的側面を無視することはできません。言語の「統語論」的側面とは以下の三つです。

① **文法**
② **構文**
③ **論理**

たとえば、①文法ですが、筆者によって副助詞の「も」の使い方が異なるということはあり得ません。また、読者によって副助詞の「も」の機能が異なって受け取られるということもあり得ません。副助詞の「も」は、たとえどんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

また、②構文ですが、本講義では「主語―述語」の関係や、「修飾語―被修飾語」の関係や、「接続語―被接続語」の関係からなる文構造のことを構文と呼びます。この構文に関しても、文法と同様のことが言えます。読者によって「文の主語―述語が異なる」ということはありません。構文もまた、どんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

最後に、③論理ですが、ここが本講義の最大の特徴です。①文法や②構文は「日本語」という言葉のルールです。それに対し、③論理は「日本語」だけにとどまりません。あらゆる言語に及ぶ最も普遍的なルールといってよいでしょう。数式が世界共通の言葉であるように、論理もまた世界共通の普遍的ルールなのです。本講義では論理を以下の「４つの言葉のルール」と「４つの言葉の使い方」とします。

- **「でない」という否定**
- **「かつ」という連言**
- **「または」という選言**
- **「ならば」という条件法**

以上の４つの言葉のルールを駆使して筆者は文を書きます。ですから、読者も４つの言葉のルールを理解して読まなければなりません。本講義ではその「ルール」と「方法」を伝えます。

さあ、最先端の現代文講義の開講です。

柳生　好之

受講の際の注意点　効果的な講義の利用法

最高の講義を用意しましたが、ただ講義を受けるだけでは力はつきません。効果的に学習するためにも、この利用法を実践してください。

Ⅰ　予習について

まず一度本文を通読し、「要旨把握」と「意味段落分け」をしてください。そして次に、「設問」を確認してから、「解答の根拠」を本文中に求めてください。最後に、本文中の解答の根拠をもとにして解答してください。

夏期講習では「制限時間なし」でよいのですべての問題に解答して下さい。その際、「解答の根拠とした文」に線を引いておいてください。できれば、「その部分を解答の根拠とした理由」をメモ欄に書いておいてください。

この作業を予習の段階でしておくことで、講義に集中できる仕組みになっています。

予習ポイント　問題を解く。解答の根拠をメモしておく。

Ⅱ　講義について

受講している間は、メモを取らないでください。

ただ見たことをノートに写す、あるいは聞いたことをその場でメモに書くというのは、「頭の中には何も残っていない」状態になりやすいのです。ですから、「復習タイム」に講義のポイントを思い出しながらメモを取ってください。あくまでも「一度頭の中に置いた」上で、「頭の中から取り出す」という作業を怠らないでください。この作業が「文章を読み、解答する」という現代文の解答プロセスのトレーニングになるのです。ただし、本文に線を引く作業は講義中に行ってください。

講義ポイント

講義中はメモを取らない。説明や図は講義後ノートに書く。

Ⅲ　復習について

よく「現代文は復習しなくてもよい」という意見を聞きます。しかし、そもそも「復習しなくてよい」なら、復習して覚えるべきポイントがない「授業」も受ける必要がないでしょう。受験生の貴重な時間をいただくわけですから、本講義は「復習ポイント」も用意してあります。

「復習ポイント」をしっかり覚えてください。これは現代文を分析する上で必要になる考え方です。

復習ポイント	ポイントを覚える。問題を解き直す。

難関国公立大　現代文　目次

第一講　「差異」と「類似」を読む……p.8
第二講　「論証」を読む……p.26
第三講　「心情」を読む……p.44
第四講　「要約」する……p.60
第五講　総合問題……p.68

第一講　「差異」と「類似」を読む

「否定（でない）」について

「否定」とは対立する概念「補集合」を作り出す言葉です。否定の前後には「対義語」または「対立する内容」がくるということを確認しましょう。

この否定は、「空所補充問題」や「傍線部説明問題」などを中心にどの設問にもからむ可能性のあるもので、論理的読解の一番の基礎になるものです。正確に分析できるようになって下さい。

「否定」のフレームワーク

① A　ではなく　B　である。
② A　よりむしろ　B。
③ A　のようで実は　B。

「差異」のフレームワーク

①　Ａ　は　Ｘ　であるのに対し、Ｂ　は　Ｙ（Ｘでない）である。
②　Ａ　は　Ｘ　であるのとは異なり（とは違って）、Ｂ　は　Ｙ（Ｘでない）である。
③　Ａ　は　Ｘ　であるのとは別に（とは逆に）、Ｂ　は　Ｙ（Ｘでない）である。

※　二者（ＡとＢ）の違いを説明するフレームワーク。

「類似」のフレームワーク

① A は X である。
　また（同様に、それと似て）
　B も X である。
② A と B は ともに X である。
③ A と同様に B も（また）X である。
④ A と B は X という点で同じである。

※「類似」のフレームワークとは、何か（A）と何か（B）の共通点について述べる時に使われるフレームワークです。
※「も」という副助詞や、「また」という副詞に注意すると類似は見つけやすくなります。
※類似を使った比喩を「類比」と言います。
※類似は「アナロジー」「類推」という言い方もあります。

傍線部内容説明問題

「傍線部内容説明問題」とは現代文において、最もオーソドックスな設問です。そしてこれから始まる「各設問別解法」の土台となる「解法」なので、しっかりとマスターしましょう。

その設問形式は次の通り、

傍線部〜とあるが、どういうことか　説明せよ。
or
どういう意味か

というものです。この問題に対して常に一定のフォームでアプローチするように心がけましょう。それが「設問解法」であり、現代文で常に高得点をとるための王道です。

では、どのようにアプローチするかというと、次の通り、

傍線部説明問題解法

――「どういうことか」の解答プロセス

①「文構造」を分析する。
・文法的構造
・論理的構造

↓

②「ポイント」を把握する。
・指示語
・比喩表現
・個人言語

↓

③「解答の根拠」となる文と対応させる。

※① 「文構造」の分析について

★ 文法的構造

・主語（主部）―述語（述部）
・修飾語（修飾部）―被修飾語（被修飾部）や目的語（目的格）や補語（補格）など
・接続助詞や連用中止法
・倒置や省略

★ 論理的構造

・否定　・差異（変化）
・連言　・類似（アナロジー）
・選言　・逆説
・条件法　・因果

※②「ポイント」になる語句について

★ 指示語（代名詞）
㊓ これ、この、このような、このように、それ、その、そのような、そのように　など
㊹ 前者、後者、両者、右の、彼　など

★ 比喩表現　＝　直喩、暗喩、メタファー、レトリック　など

★ 個人言語　＝　筆者が一般的な意味とは異なる特殊な意味で使っている言葉、学術（専門）用語

※③「解答の根拠」となる部分との対応について

★ 同値関係
★ 対立関係
★ 因果関係
★ 包摂関係（抽象と具体の関係）

以上の関係がある部分と対応させます。
このような関係で対応した部分が、記述解答を書く際の「解答の根拠」となります。

（次ページより問題演習）

次の文章は、哲学研究者の三浦俊彦が二〇〇五年に執筆したものである。これを読んで後の問に答えなさい。（出題の都合上、本文に省略した箇所がある。）

[注一]ラッセルが標的とした[注二]ヘーゲル的一元論とは、次のような教説である。

「事物が多数存在するというのは、幻想だ。ａとｂという別個のものがあり、その間にＲという関係が成り立っているとする。ａは、〈ｂに対し関係Ｒにある〉という属性を持つ。なぜなら、もしその属性を持たなければ、ａは現実のａでないだろうから。同様に、ｂは、〈ａに対し関係Ｒにある〉という属性を持つ。つまり、どんなものも、他のあらゆるものとの関係を列挙しなければ、それ自身の完全な特徴づけはできないことになる。全体以外のものは、独立して分離するとそれ自身の属性を失ってしまう。よって、個別に分離して存在するようにみえるものたちは真の実在ではなく、究極の一者だけが本当の存在である」

この世界観を信奉しているかぎり、「分析」は不可能だろう。なにしろ、あるものを頭の中で個別に考えただけで、それは既に全体との本来の関係から孤立させられており、真実の姿を破壊されているからである。複雑な

ものを構成要素に区分して、実在の構造と知識の根拠を調べるといった、後年のラッセルの方法は全く使えないことになる。

一元論にとって必要なのは、関係は属性に還元できる、という前提である。つまり、あるものａが他のものとの間に持つ関係は、すべて、ａの内的な属性と同じものだ、という前提である。このような関係をラッセルは「(1)内的関係」と呼ぶ。

内的関係というものはたしかにある。あなたが石につまずけば、あなたは「この石につまずいた」という属性を持つだろう。また、現実にあなたを生んだ母親から生まれた、という属性を、あなたは確かに持つと言うべきだろう。「……につまずく」「……から生まれた」といった関係は、属性に翻訳することができる。それらは内的関係と言ってよい。

しかしたとえば、「富士山より小さい」という属性を、あなたは持つのだろうか。たしかにあなたは、富士山に対して、「より小さい」という関係を持つ。しかしだからといって、「富士山より小さい」という属性が、あなた自身に備わっているのだろうか。

バートランド・ラッセルは、「二〇〇五年二月二日現在、三浦俊彦によって思い描かれている」という属性を持つのだろうか。たしかにラッセルは、三浦に対して、「二〇〇五年二月二日現在、思い描かれる」という関係を持っ

ている。しかしだからといって、「二〇〇五年二月二日現在、三浦俊彦によって思い描かれる」という属性が、ラッセル自身に備わっていたのだろうか。⑵自分が死んだ三十五年も後に、会ったこともない極東の外国人の心に勝手に生じる状態が、ラッセル自身の「属性」であると言えるのだろうか。

　属性には還元できない関係をラッセルは「外的関係」と呼ぶ。外的関係は、内的関係とは異なり、当の対象にとって本質的でないような関係である。内的関係と外的関係の区別は曖昧（あいまい）で、特定の関係がどちらなのかは、直観的に判別するしかないが、いずれにせよヘーゲル主義的一元論は、「すべての関係は内的関係である」と主張している。それをラッセルは「内的関係の[注三]公理」と呼び、この公理を否定する論証をいくつか提示した。この公理を否定するには反例を一つでも挙げれば十分だろう。あるいは、反例を挙げずに、いかに関係を属性に還元できたとしても必ず⑶別の関係が残る、という一般的な論証で応ずることもできる。ラッセルは、両方の種類の反論を試みた。

　まず、反例を挙げるほうの議論。ラッセルは、因果関係を含まない非対称的関係を反例とする。非対称的関係とは、「より大きい」「より先である」のような、一方向には成り立つが逆方向には成り立たない関係だ。たとえば、ソクラテスはラッセルより先に生まれた。内的関係の公理によると、

ソクラテスは「ラッセルより先に生まれた」という属性Ａを持ち、ラッセルは「ソクラテスより後に生まれた」という属性Ｂを持つ。関係が属性に本当に還元されたのであれば、属性ＡとＢは、関係性を含んでいないはずである。つまり、基本的な日付などによって表わされているはずである。

しかしそれでもなお、属性ＡとＢのどちらが先か、つまりどちらが先に例示されたのか、という疑問がまだ成り立ちうるだろう（属性が例示されるとは、その属性を持つ存在者が生ずること）。すると、「より先である」という関係がまだ残っていることになる。そこで、属性Ａは「属性Ｂに先立つ」という属性Ｃを持ち、属性Ｂは「属性Ａに先立たれる」という属性Ｄを持つのだ、というふうにして、属性ＡとＢとの間の「先立つ」を属性に還元するとしよう。しかしその場合もまた、属性ＣとＤとはどちらが先なのか、という問いが残ってしまう。以下同様にして、関係はいつまでたっても消去できないのである。

右の論証は、『数学の諸原理』（一九〇三）でいろいろなバリエーションで提示された。数学では、大小関係や包含関係など、非対称的関係が重要な役割を演ずる。数学にとって関係そのものが不可欠であることを示すのは、ラッセルにとって重要だったのである。

次に、一般的な論証。こちらは、『ライプニッツの哲学』（一九〇〇）で

試みられた論証である。あるものａが属性Ｆを持つとき、ａがＦを持たないのではなく持つとはどういうことなのか、と問うてみよう。ａとＦとの関係はどういうものか、と。関係をいくら属性に還元しても、属性の持ち主と属性との関係が残ってしまうので、完全な還元は不可能ということになろう。そこで、属性の持ち主と属性とは別のものではなく、同一なのだ、という抜け道が思いつかれる。実際、すべては一者だとする一元論にはこの弁明はふさわしい。

しかし属性の持ち主と属性が同じというのは、あるものａはそれが持つとされる諸々（もろもろ）の属性すべてと同一だということだが、そのとき、同じａに属するそれら属性どうしの関係はどのようなものだろうか。ａが属性ＦとＧを持ち、Ｈを持たないというとき、ＦとＧが共有してＨは共有しない何事かがあると言わざるをえないが、それこそは「ともにａと同一である」という同一性関係（共属関係）であろう。しかしこれでは、Ｆがａに属するという属性性が、共属という関係性によって基礎づけられることになる。関係は属性に還元されるという一元論の趣旨とは反対のことが正しくなってしまうのだ。

こうしてさまざまな側面から一元論を攻撃することで、ラッセルはイギリス哲学に多元論的経験主義を回復した。「関係は実在する」「世界には多

数のものがある」という信念を抱くことができるようになったラッセルは、このときの転向を「とても充実した宇宙が与えられた」と喜びをもって述懐している。とくに「関係は実在する」というテーゼは、「関係」「属性」といった「普遍者」の実在を主張するラッセルの[注四]反唯名論のスローガンとなり続けた。

（三浦俊彦『ラッセルのパラドクス―世界を読み換える哲学―』による）

注一　ラッセル＝イギリスの論理学者、哲学者、数学者。

注二　ヘーゲル＝ドイツの哲学者。

注三　公理＝数学・論理学で自明な真理として認められ、他の命題の前提となる根本命題。

注四　反唯名論＝個物のみが存在し、普遍は個物をさす名にすぎないとする考え方を否定し、普遍の実在性を主張する立場。

問一　傍線部(1)の「内的関係」とは何か。「外的関係」との違いをふまえて簡潔に説明しなさい。

問二　傍線部(2)の「自分が死んだ三十五年も後に、会ったこともない極東の外国人の心に勝手に生じる」は、一種の強調表現と考えられる。どういうことを強調したものかを説明しなさい。

問三　傍線部(3)の「別の関係」とはどのような関係か。それを具体的に示した部分を本文中から十五字以内で抜き出しなさい。

問四　本文で紹介されているラッセルによる「内的関係の公理」を否定する議論のうち、反例を挙げるほうの議論の骨子を七十字以内（句読点を含む）でまとめなさい。ただし、「属性」「関係」「還元」という言葉を用いること。

（次ページより解答欄）

問一

問二

問三

問四

解答解説

第一講「差異」と「類似」を読む　解答

問一

「外的関係」は属性に還元できず、当の対象にとって本質的でないような関係であるのに対し、「内的関係」は全て属性に還元でき、当の対象にとって本質的な関係である。

問二

ラッセルと三浦俊彦の関係性を示すことで、全ての関係が当の対象の属性に還元できるとは限らない、あるいはある関係を当の属性に還元できたとしても必ず別の関係が残るということを強調しようとしている。

問三

属性の持ち主と属性との関係

問四

「先立つ」という関係が消去できない、因果関係を含まない非対称的関係という反例が存在するため、すべての関係が属性に還元できることは限らない。